

# Junjiro Takakusu and Soho Tokutomi

MANAKO Akimasa

## Key words

Junjiro Takakusu/Soho Tokutomi/Masao Takakusu

## Summary

This paper looks at the correspondence between Junjiro Takakusu and Soho Tokutomi by examining twelve letters owned by the Soho Tokutomi Memorial Museum in Kanagawa prefecture. Also, this paper includes the reprinting of these twelve letters. These letters are addressed to Soho Tokutomi from Junjiro Takakusu, his son Masao Takakusu, and the concerned people. There are various kinds of letters that were exchanged, for example, invitations, request documents, and letters of appreciation. These letters reveal the fact that Takakusu had a broad range of relationships with large number of people. They also show that Masao, Takakusu's son, had a close relationship with Tokutomi. In addition, I was able to posit the dates of three of these letters, which were previously unknown.

高楠順次郎と徳富蘇峰  
— 徳富宛書簡の翻刻と概要 —

真名子 晃 征

# 高楠順次郎と徳富蘇峰

— 徳富宛書簡の翻刻と概要 —

真名子 晃 征

〈キーワード〉 高楠順次郎／徳富蘇峰／高楠正男

はじめに

武蔵野大学では、学祖・高楠順次郎（二八六六—一九四五）に関する情報の収集・整理・発信を目的として、平成二十六年より、共同研究を開始した。平成二十六年度は「高楠順次郎の多角的研究」（代表・石上和敬）というテーマ設定のもと、共同研究者各々の専門性を活かし、順次郎という人物を様々な視点から捉えることよって、その人物像の解明に取り組んだ。つづく平成二十七—二十八年度は、研究テーマ「高楠順次郎関連情報データベースの構築」（代表・石上和敬）として、既存の情報に加え、研究途中で発見された新出資料等も含めて整理し、電子化を進め、データベースの構築を試みている。いずれの研究も武蔵野大学の助成

を得て、これまでもいくつかの成果を発表した。

本論考は、これらの研究の一環として、順次郎の交友関係について調査するなかで知り得た、徳富蘇峰（一八六三—一九五七）との交流について報告するものである。順次郎の残した数多くの業績については改めて述べるまでもないが、それを可能とした要因の一つが、分野を問わない幅広い交友関係である。そのことは、本研究で情報整理をする段階でも強く感じられるものであった。

そして、今回新たに収集した資料から明らかになったのが、徳富との交流である。神奈川県中郡の徳富蘇峰記念館（公益財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団）には、順次郎とその子・高楠正男（一八九七—一九六六）、および関係各所から徳富に送られた、十二通の書簡が所蔵されている。<sup>1</sup>以下、この徳富宛書簡の翻刻を通して、順次郎および正男と徳富との交流について紹介したい。

#### 凡例

- ・旧字体は通行のものに改めた。また、手書き文書における片仮名は平仮名に改めた。
- ・文字サイズは再現していない。
- ・難読の箇所は、その字数分を□で補った。
- ・原本のおおよその体裁は再現したが、紙面の都合と考えられる改行は考慮していない。
- ・句読点・鉤括弧等を適宜付した。

①高楠順次郎書簡 大正十四年（一九二五）八月十八日

【翻刻】

拝啓愈御清祥奉賀上候陳者父高楠孫三郎正春本年八十歳の高齡に達し候に付知友の方々に御願ひ致し詩歌  
書画等の御染筆御寄贈を仰ぎ集成して寿帖と為し座右に珍藏為致度存候就ては誠に恐入候得共我々家族の  
微意御洞察被成下何にても御随意御揮毫御投与願上度右御願迄如此に御座候 拜具

嗣子 高楠順次郎

霜子

孫 鶴子

榮子

孫 正男

光枝

曾孫 洵

外一同拜上

徳富猪一郎<sup>②</sup> 殿

高楠正春通称孫三郎、現住神戸市元町五丁目二百八番地、伊勢河芸郡高野尾村高楠家ヨリ出ヅ、其先楠木氏、曾テ高野尾城主タリシヨリ現姓ニ改ム、慶長以後下リテ郷士トナリ世々邑司タリ、幼ニシテ家学ヲ修メ弱冠神戸に移リ後商業ニ従事ス、深ク仏教ヲ信ジ真宗ニ属ス、現二本願寺本末共保財団監事護持会評議員タリ、微力ナルモ極メテ慈善ヲ喜ブ、又和歌ヲ好ミ京都月輪山莊水鷄会々員タリ

御ほとけの教のまゝに人のみち

ふみもたかへて八十へにけり 正春

### 【概要】

順次郎の父・正春（孫三郎）の八十歳の祝賀にあたり、知友の人々に「詩歌書画等の御染筆」の寄贈を依頼したもので、印刷による文書二枚である。差出人は順次郎となっており、本文中には順次郎夫妻をはじめとする親族の名が連なる。寄贈されたものは寿帖として蔵すると記されている。二枚目には、父・正春の略歴と、正春の作となる歌が付されている。

②高楠順次郎書簡 大正十四年（一九二五）九月二日

【翻刻】

拝啓 過日は御多用中之御染筆御寄贈御願申上候処早速御揮毫御郵送に預り千万忝く御礼申上候追て寿帖と為し永く家宝として珍藏可致候乍略儀以書中御礼申遣度 敬具

大正十四年九月二日

高楠順次郎

徳富老台

侍史

【概要】

徳富から寄贈された染筆に対する礼状で、手書きによる文書一枚である。内容および末尾に記された日付より、書簡①で依頼した染筆のことであると考えられる。

③高楠順次郎書簡 昭和四年（一九二九）七月十二日

【翻刻】

謹啓 時下 酷暑之砌り 貴台益々御健祥之段 奉大賀候

陳者 今回当会に於て 本朝現存の敦煌古写経を編次し 『昭和法宝総目録』中に掲載致度 奉存候に付  
ては貴殿御珍藏之敦煌本古写経に就き右記事項御教示に預り度 御多忙中甚だ恐縮に奉存候共 折返し御  
下報被下様奉願上候

七月十二日

敬具

大正一切経刊行会

高楠順次郎

【概要】

『大正新脩大藏経』別巻の『昭和法宝総目録』（全三巻、大蔵出版、一九二九）の刊行にあたり、徳富が所蔵する敦煌古写経に関して情報提供を依頼する、手書き文書一枚である。「大正一切経刊行会」の封筒が用いられ、差出人として順次郎の名が手書きで付されている。また、表面には赤字で「至急」の印が押されている。

『昭和法宝総目録』第一巻所収「敦煌本古逸経論章疏並古写経目録」のなか、「七、諸家所蔵敦煌本古写経目録」の項に徳富の名は見あたらないが、成篋堂文庫所蔵として「妙法華経普賢菩薩観発品第二十八／維摩詰経

不思議品第六」が挙げられている。<sup>③</sup>成實堂文庫とは徳富が収集した古典籍・古文書のことである。これらは昭和十五年（一九四〇）、親交のあった石川武美（一八八七—一九六一）が一括購入し、現在は一般財団法人石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）所蔵となっており、収蔵品は約十萬冊にのぼる。

『昭和法寶総目録』第一巻は、昭和四年（一九二九）八月十日発行となっており、本書簡に記載された七月十二日から一ヶ月を経ずに出版されている。順次郎は事前に徳富所蔵の敦煌古写経について知っており、本書簡における依頼は、出版前の確認のためであったと考えられる。

④ 高楠順次郎書簡 昭和十九年（一九四四）五月三日

【翻刻】

拝啓 愈御法祥奉賀上候 陳者 小生□□の砌り文化勲章拝受いたし御戻之時早速御祝意を頂き候事恐縮  
至極に存じ候 御芳情に対し厚く御礼申上候

先年御蔵書中に拝見いたし候『伊勢神宮寺勅修一切経』の刊本一二部再応拝見之儀用意候何人□□使はし  
候際は健在御指示願上度□□小生□□病人の状態御憐み被下候再起の時あらば相伺□□上度候 拝具

高楠順次郎 拝

徳富尊大人 御前

【概要】

文化勲章受章の祝いに対する返礼と、徳富が所蔵する文献の閲覧を依頼する手書き文書一枚である。昭和十九年度の文化勲章の発令は、四月二十九日付であり、受章直後に記された手紙となる。

書簡の後半では、徳富の所蔵する『伊勢神宮寺勅修一切経』刊本十二部を再度閲覧したいと申し出ている。しかし、自身の病状を告げつつ、再起の時には何うと記す。順次郎はこの翌年亡くなっており、最晩年の書簡となる。順次郎の学問研究に対する態度が知られる。

⑤ 高楠正男書簡 昭和五年（一九三〇）二月二十七日

【翻刻】

時に

出発に際し忝く御丁寧に御使を賜り難有御礼申候

神戸にて

高楠正男 拝

【概要】

正男から徳富に宛てられた絵葉書で、裏面は神戸・栄町通の風景写真である。文末より神戸から投函された

ことがわかり、消印も「神戸中央」となっている。この書簡からは、正男が何処かに出発する直前に送った挨拶文であることしかわからない。

ただ、本書簡の内容に関しては、大雄閣が発行する雑誌『現代仏教』によって当時の状況を知ることができ。大正十三年（一九二四）に創刊された本誌は、順次郎を主筆として、多くの作家・学者が寄稿、正男も随筆の連載をはじめ、ほぼ毎号原稿を寄せている。

これらによって、その動向を追ってみると、正男は昭和五年（一九三〇）五月から一年間、ヨーロッパへ渡っているが、その渡航前、正男は神戸に一時滞在している。滞在地あるいは渡航中の出来事は、『現代仏教』に数回に分けて報告されており、神戸での様子は、連載の随筆「篝村亭漫筆」において語られる<sup>④</sup>。これによれば、正男は二月二十七日午後五時の神戸発の便でヨーロッパへと出発している。よって、この手紙は出発当日に投函されたものであることがわかる。

⑥ 高楠正男書簡 昭和七年（一九三二）十二月十九日

【翻刻】

啓上

御無沙汰申上で居ります。益々御勇健 貴家の為め何よりの御事と存じます。毎日東日夕刊により御論説を拝見致し多大の御指導を頂て居ります。去る十八附夕刊に『禪に生くる』に対して御執筆を得まして難

有御礼申上ます。

同著は非常に好評で御座いまして亦先生の御執筆により一層の□行を□しました事を厚く御礼申上ます。近日中東日へ『禪に生くる』の広告を再び御願ひする事で□□して居ります。父も無事□致居りよろしく申上てくれとの申出で御座いました。

猶末筆乍ら小誌『現代佛教』松岡讓氏等の入社を得まして崇敬の為に努力致□□□□居ります。□□か御暇の節には是非御執筆の榮を賜りたく無礼乍ら御願ひ申します。

先は不取敢御礼まで

十九日 高楠正男 拜

徳富先生 侍史

### 【概要】

正男から徳富に宛てられた手書き文書一枚である。前半は、東京日日新聞（現・毎日新聞）夕刊に掲載された徳富執筆の記事に関するものである。徳富は昭和四年（一九二九）に東京日日新聞社の社賓として入社、連載記事「日日だより」を担当した。件の記事は、昭和七年（一九三二）年十二月十八日付のものである。タイトルは「禪に生くる」で、これは宮嶋資夫『禪に生くる』（大雄閣、一九三二）に対する書評である。<sup>5)</sup>

宮嶋資夫（一八八六—一九五一）は小説をはじめ様々な作品を残し、『坑夫』（近代思想社、一九一六）は、日本プロレタリア文学の先駆ともされる。<sup>6)</sup>昭和五年（一九三〇）、四十五歳のとき、京都・天龍寺にて得度、以降は「宮嶋蓬州」の名義で仏教に関しても執筆する。また、晩年は浄土系の仏典に接するなかで親鸞の教えにふれ、浄土真宗に帰依した。<sup>7)</sup>

さて、『禪に生くる』の刊行所である大雄閣は、正男がその経営の多くを担っていた出版社であり、順次郎もそこから多くの書籍を出版している。なお、宮嶋も大雄閣の出版する『現代仏教』に、蓬州名義の文章が何度か掲載されており、本書出版後には『禪に生くる』の執筆に関する文章を寄せている。<sup>(8)</sup> 本書簡は、自社の書籍を紙面で紹介した徳富に対して謝辞を述べているのである<sup>(9)</sup>。

書簡の後半では、『現代仏教』に松岡譲（一八九一—一九六九）を迎えたことを伝えている。松岡は真宗大谷派の寺院に生まれるが父の後は継がず、夏目漱石の門下に入り、作家として多くの著書を残した。

先の宮嶋と同じく、松岡も創刊当初より幾度か寄稿していたが、本書簡が送られた一九三二年三月号の人物紹介欄「人物スナップ」で紹介され、六月号からは「私のメモ」と題して連載記事も執筆している。<sup>(10)</sup> よって、この頃に『現代仏教』に入社したのであろう。同年十二月号には、正男が「松岡浅野両氏を迎えて」という記事を寄せ、松岡と浅野研真（一八九八—一九三九）を迎えたことを紹介している。<sup>(11)</sup> 昭和八年（一九三三）発行分からは、松岡譲が本誌の編集人を務めているが、これは順次郎の要請であったという。

⑦ 高楠正男書簡 昭和二十六年（一九五二）六月十日

【翻刻】

謹啓 新緑の候貴台益々御清祥の趣賀上げ奉ります

陳者来る二十八日は「宏学院釈 順成」故雪頂・高楠順次郎博士の七回忌に、また八月十三日は「貞順院 釈尼妙好」故霜子夫人の十三回忌に相当りますので、左記の通り追悼会を兼修致し度いと存じます。尚法要後、講演・記念撮影・引続いて別室に於て、遺品展示のもとに故博士並に夫人を偲ぶ会を催します。御多用中恐縮ながら何卒御繰合せの上御誘合せで御来臨賜り度く此段御案内申上げます

昭和二十六年六月十日

敬白

追伸 靈前に御献進の詩歌・書画等は、予め世話人宛にお送り賜れば幸甚に存じます

今回カルピス食品工業株式会社（会長三島海雲氏・社長国分勘兵衛氏）よりカルピスの御供養に預ることになりました。茲に謹んで御好意を深謝申上げる次第でございます

日時 来る六月二十八日（木曜日） 午後二時―五時

場所 東京 築地本願寺 I 法要・講演・記念撮影（本堂） 二時―三時半

II 故人を偲ぶ会・遺品展示（別室） 三時半―五時

会費 三百円（故人を偲ぶ会の食事費につき御申込の方に限り当日受付にて申受けること）

★参会者各位に記念の高楠博士辞世の詩箋とカルピス接待券を謹呈申上げます

### 【概要】

順次郎七回忌および霜子夫人十三回忌の兼修を案内する往復葉書の往信で、差出人は高楠正男・雪頂忌世話人の連名となっている。昭和二十六年（二九五二）六月二十八日、場所は築地本願寺となっている。この法要に際して、カルピス食品株式会社からの品を預かったとされ、会長・三島海雲（一八七八―一九七四）、社

長・十代目国分勘兵衛（一八八三—一九七五）の名が記されている。

### ⑧ 高楠正男書簡 年代不明

【翻刻】

啓上 其後御無沙汰申上て居ります此状持参之方は『阿毘達磨俱舍論図記』の著者 大塩毒山氏でありまして図記を編纂する為十有余年の苦心をせられまして此程漸く完成を見るわけで当代稀れに見る篤学の方であります

御多用中甚だ恐縮に存じますが御向接を賜り度く是非先生に御紹介を願ひ度しと切なる依頼を御断りも出  
来ず無礼乍ら此書を呈する次第何卒よろしく御願ひ申上ます

徳富先生

高楠正男拜

【概要】

正男から徳富に宛てられた手書き文書二枚で、大塩毒山編著『阿毘達磨俱舍論図記』（大雄閣、一九三四）を徳富に紹介している。本書の編著者にはその他、佐伯定胤（一八六七—一九五二）・木村泰賢（一八八一—一九三〇）・荻原雲来（一八六九—一九三七）等とともに、順次郎も名を連ねる。消印や書簡の内容からは、本書簡がいつ頃書かれたものかはわからないが、少なくとも昭和九年（一九三四）の本書出版から程ない時期

と推定される。

⑨ 高楠正男書簡 年代不明

【翻刻】

四月八日正午に到着致しました当分当地に滞在致したいと思つて居ります。  
先生の御健康を遙かに祈ります。

15 rue de Colonel moll

171, Paris

十六日 高楠正男

【概要】

正男から徳富に送られた絵葉書で、パリの滞在地からの挨拶文である。裏面はフランス・パリのマドレーヌ教会の写真である。しばらくの間、パリに滞在するという旨の手紙で、パリ十七区テルヌのコロネル・モル通りの住所が記載されている。

消印からは投函の日付は不明であるが、文頭では四月八日にパリに到着したと伝え、文末では十六日に書い

た手紙であることがわかる。先の書簡⑤にて述べたように、正男の渡欧は昭和五年（一九三〇）であるから、この手紙は昭和五年（一九三〇）四月十六日の書簡と考えられる。

⑩高楠正男書簡 年代不明

【翻刻】

昨日より急に暑くなり全部夏服に気替へました。

只今カムラン湾の沖を航行中です。

遙に御健康を祈ります。

十日 高楠正男

船中にて先生を尊敬せる天主教牧師ガラン氏と会談仕候。甚太郎

【概要】

正男から徳富に送られた絵葉書である。投函の場所は不明だが、ベトナムのカムラン湾沖を渡航中に書かれた挨拶文である。裏面は京都・平安神宮の泰平閣（橋殿）の写真である。

前述のパリからの絵葉書同様、消印からは投函の日付は不明で、文末の「十日」という日付のみしかわ

からない。ただ、これも書簡⑤および書簡⑨との関連で考えると、ヨーロッパへ向かう途中の、昭和五年（一九三〇）三月十日のことと予想される。この推測を補うものとして、これも『現代仏教』の記事に、三月三日に上海に到着したという情報が残る。<sup>13</sup> その一週間後にカムラン湾沖を通過したと考えることも可能であろう。

なお、追伸として書かれる、牧師ガラン氏の詳細については不明であるが、文末の「甚太郎」の語に注目したい。正男の紀行文には同乗者との交流も記されているが、三月二日の項には、文部省史料編纂官の藤井甚太郎（一八八三—一九八五）が部屋を訪ねてきたとある。藤井は明治維新の史料収集のため、ロンドンに向かう途中であったという。<sup>13</sup> 藤井と徳富の関係については、徳富蘇峰記念館に藤井から徳富に宛てた書簡二十六通が所蔵されており、渡航前から交流があったことがわかる。<sup>14</sup>

以上のことから、この絵葉書は、同じ船に乗り合わせた正男と藤井が、連名で徳富に宛てた挨拶文であったと考えられる。

⑪高楠博士帰朝歓迎会書簡 昭和十四年（一九三九）九月二十二日

【翻刻】

拝啓

時下秋冷の候貴台益々御清勝之段奉慶賀候

陳者高楠順次郎博士には昨年来布哇大学の招聘に應じ御出講中の処今般無事その任を了へられ御帰朝相成候に就ては博士の日本文化海外宣揚の御努力を感謝致すべく左記の通り一夕歓迎会を開催任り度く存候間何卒御出席賜り度く此段御案内申上候

敬具

昭和十四年九月二十二日

一、日時 九月二十九日（金曜日）午後五時

一、場所 上野精養軒

一、会費 五円也

高楠博士帰朝歓迎会発起人（五十音順）

朝倉晁瑞	小村捷治	花井 忠
麻田駒之助	小林芳次郎	花山信勝
浅野孝之	佐佐木信綱	林屋友次郎
粟津清亮	佐竹大雄	深井英五
安藤正純	齐藤正雄	福島直四郎
井上哲次郎	祥雲晚成	富士川 游
井山春子	里見達雄	逸見梅栄
伊東忠太	椎尾弁匡	星 一
泉 道雄	塩入亮忠	正木直彦
和泉得成	清水龍山	松井 茂
池田澄達	下村寿一	松本 学
石上昭然	芝田徹心	松本徳明
岩野喜久代	副島八十六	真溪蒼空朗
宇井伯寿	高井観海	三島海雲
宇野円空	高島平三郎	三宅静子
馬田行啓	高島米峰	水野梅晁
小野清一郎	鷹谷俊之	宮本正尊
大倉邦彦	立花俊道	村上龍英
大谷泰子	龍江義信	茂木佐平治

大村桂巖	頭本元貞	望月圭介
大森亮順	土屋詮教	森川智徳
大佛 衛	常光浩然	山岡万之助
荻野伸三郎	徳富蘇峰	山本快龍
奥田宏雲	常盤大定	吉村貫練
加藤精神	友枝高彦	和田徹城
神林隆浄	長井真琴	鷺尾順敬
木村省吾	野依秀市	渡辺哲信
久保埜太運	乗杉嘉寿	渡辺榎雄
倉持秀峰	蓮沢成淳	

追て準備の都合も有之候間御出席の有無折返し御報知被下度御願申上候

【概要】

順次郎の帰朝歓迎会を案内する、印刷による文書一枚である。差出人は「高楠博士帰朝歓迎会発起人」となっており、本文中には、発起人として八十六人の名が記されている。

順次郎は昭和十四年（一九三八）八月から一年間、ハワイに渡る。滞在中は、ハワイ大学東方学院に招聘され「仏教哲学」「仏教の日本に与えた影響」および梵語の講義を行い、また、ハワイ本願寺において追悼会などを開催し、翌年八月に帰国している。本会はその帰朝歓迎会となる。

⑫高楠博士喜寿祝賀会発起人書簡 昭和十七年（一九四二）五月一日

【翻刻】

拝啓

時下春暖之候貴台愈々御清適之趣奉大賀候 陳者高楠順次郎博士には本年七十七歳の御高齡を迎へられ益々御健在にて邦家の為御活動被遊候事大慶至極に奉存候 就而博士積年の御功勞を感謝し併せて将来の御健勝を祝すべく左記の如く高楠博士喜寿祝賀会を挙行仕り候間何卒万障御練合御列席の榮を賜り度く此段御案内申上候

一、日時 五月十八日（月曜）午後四時半

一、会場 神田一ツ橋学士会館

一、会費 金六円也

五月一日 高楠博士喜寿祝賀会

発起人（五十音順）

安藤正純 木村省吾 長井真琴

朝倉晁瑞	桐原葆見	中山太一
池田澄達	倉持秀峰	中谷春子
泉 道雄	小村捷治	野生司香雪
和泉得成	後藤亮一	花山信勝
岩野喜久代	里見達雄	干潟龍祥
宇井伯寿	齐藤正雄	深井英五
宇野円空	椎尾弁匡	藤本真光
馬田行啓	芝田徹心	三島海雲
大倉邦彦	鈴木宗忠	水野梅暁
大森亮順	高島米峰	南岩倉具威
大村桂巖	鷹谷俊之	宮本正尊
小野清一郎	谷口孤山	茂木佐平次 <small>マツ</small>
小野せつ子	頭本元貞	森川智徳
加藤精神	辻 直四郎	山田龍城
神林隆浄	常盤大定	山本快龍
金倉円照	友枝高彦	渡辺哲信

○乍勝手準備の都合有之候間御出席の有無御一報賜度候

## 【概要】

順次郎の喜寿祝賀会を案内する、印刷による文書一枚である。差出人は「高楠博士喜寿祝賀会発起人」となっており、本文中に五十一人の名が連なる。

## おわりに

以下に、順次郎・正男および関係各所から徳富に送られた十二通の書簡の翻刻を通して知られたことを整理して、本稿のまとめとしたい。

順次郎から送られた書簡からは、文献閲覧や情報提供を依頼するなど、学術関係での交流があったことがわかる。正男からは出版社である大雄閣の職務に関わる書簡の他、渡欧中の挨拶文などの私信が送られるといった関係も明らかとなった。さらに、順次郎の父・正春の八十歳の祝賀、帰朝歓迎会、喜寿祝賀会などのその他の面においても交流がもたれていたことがわかる。

また、これまでも指摘されてきたことではあるが、本書簡の翻刻のなかでも、徳富以外の多くの人物との交流が確認できた。書簡⑪および書簡⑫には多種多様な人物の名が記されていたが、その他、宮嶋資夫・松岡譲などとの関係について若干整理できたように思う。

加えて、今回翻刻作業を行うなかで、年代不明とされていた三つの書簡の詳細および、その年代を特定することができた。いずれも考察が不十分ではあるが、それらは今後の課題としたい。

註

(1) 公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵 徳富蘇峰宛書簡目録』（徳富蘇峰記念館、一九九五）二〇一頁  
 記念館所蔵の書簡に関しては、徳富蘇峰記念館HP「書簡検索」(<http://soho-tokutomi.or.jp/db/jinbutsu/>)においても検索が可能である。⑥高楠博士帰朝歓迎会書簡については、目録には掲載されておらず、右の「書簡検索」においてのみ確認できる。

また、本稿の考察対象には含めていないが、この十二通の書簡とは別に、徳富の秘書である並木仙太郎宛の書簡が封筒のみ現存する。

- (2) この箇所のみ、手書きとなる。
- (3) 『昭和法宝総目録』第一卷（大蔵出版、一九二九）一〇六五頁
- (4) 高楠正男「篝村亭漫筆」（『現代仏教』七二、一九三〇、四月号）五五頁
- (5) 宮嶋は宮島と表記されることもあるが、本稿では宮嶋の表記で統一した。
- (6) 西田勝・宮嶋秀・黒古一夫編『宮嶋資夫著作集』（慶友社、一九八三）に再録。
- (7) 宮嶋の履歴・著書等については、黒古一夫編『宮嶋資夫年譜』（西田勝・宮嶋秀・黒古一夫編『宮嶋資夫著作集七』慶友社、一九八三）に詳しい。なお、この年譜によれば、宮嶋は十代の頃、母に連れられて浄土真宗の寺院に説教を聞きに行っていたという（二七五頁）。
- (8) 宮嶋蓬州「禅に生くる」の出版に際して（『現代仏教』九九、一九三三、十二月号）五一頁
- (9) 翌年刊行された続編『続・禅に生くる』（大雄閣、一九三三）の奥付には、刊行者として高楠正男の名が記されている。
- (10) 「人物スナップ」（『現代仏教』九〇、一九三三、三月号）、松岡譲「私のメモ」（一）―（七）（『現代仏教』九三―九九、一九三三、六月号―十二月号）
- (11) 高楠正男「松岡浅野両氏を迎えて」（『現代仏教』九九、一九三三、十二月号）四九頁
- (12) 高楠正男「篝村亭漫筆」（『現代仏教』七三、一九三〇、五月号）四二頁
- (13) 高楠正男「篝村亭漫筆」（『現代仏教』七三、一九三〇、五月号）四一頁

(14) 前掲書『徳富蘇峰宛書簡目録』二九七頁

(15) ハワイ訪問の様子については、高楠順次郎「布哇より帰りて」(『ピタカ』一五―一二、一九三九、十二月号) など、順次郎自身が著したいくつかの原稿によって知ることができる。その他については、『高楠順次郎全集第十卷』(教育新潮社、二〇一三) 所収「高楠順次郎年次別書籍論文目録」の一九三八年・一九三九年の項を参照。

## 付記

本稿の作成にあたり、徳富蘇峰記念館(公益財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団)のご協力を得て書簡を調査することができました。貴重な資料を複写する機会をいただいた関係者の方々に対しまして、記して感謝申し上げます。

(武蔵野大学仏教文化研究所研究員(専門)中国浄土教)